

Rana Cane 蛙犬について

蛙と犬は、私と姉が幼い頃苦手だった動物である。姉は蛙が大嫌いで、私は犬と相性が悪かった。ぬいぐるみを扱うかのように接してくる子供の私に、犬は牙を見せた。柔らかい毛玉のような犬が、突如ウニのようにとげとげしく不可解な生き物に変貌する。鼻先で風船が破裂したような瞬間を幼い私は数多く経験した。犬のことが好きなのに、うまくコミュニケーションが取れなかったので、犬の牙が怖くなったのだ。

姉の蛙に対する感情には、生理的な嫌悪を凌駕した畏怖に近い何か潜む。彼女の蛙をめぐる個人的なエピソードからは、この動物が犬と同じように、人間にとって身近でありふれた動物でありながら、聖と俗両方の世界に通じる強烈な何かを表わし、大古の昔から世界中で様々な現象を象徴する役割を担ってきたのだということが思い起こされる。蛙は又、近現代の日本の義務教育の中で、ある重要な役割を担っている：化学的態度のイニシエーション。蛙は生物の授業の中で、解剖実験に供される。私はその時のことをいまでもぼんやりと覚えている。そこでは蛙独自の体制への言及がほぼなかったように思う。生徒たちはあおむけになった蛙のお腹の中にヒトの器官と共通するものを見いだすことで、科学的な眼差しというものを実地に体験した。動物の中に我々自身をみつけること。より具体的に言えば、蛙の中から自分たちが把握できることを他の良く分からない一切切切から切り離し、選り分けること。それを我々の間で合理的に説明できるようになるまで、いじくること。

犬は文明が地球上に興って以降、世界の各地で多種多様な目的のためその身体を人の手で改変させられてきた。狩りのために、早く走るために、美しさ、愛らしさのために、鼻づら、耳、尾、爪、体毛、頭蓋などの身体のあるあらゆる部位を。

当たり前なことだけれど、私たちは我々の意識が届く範囲の事しか尊ぶことができない。その他の意識の体系とそこから派生する諸々については注意を向けず、万象の中に自分の頭の中と同じ構造のものを見つることを繰り返す。猫が、雨の日はどの扉からでも家の外は雨なんだということをいつまでたっても理解しようとしなれないと同様の頑迷さで。

犬と蛙を起点とした動物にまつわる様々な思考の中で、彼らの中の、こちらに知るすべのないもの、故にかえりみられずに打ち捨てられてきたものが、このごろとても気にかかる。それらを化身、未知の存在として表現し、物語る身体性という今まで様々に試みて来たテーマの中で、任意の参加者により動かすインタラクティブ彫刻プロジェクトとして発展させたく思った。この彫刻から、シルクスクリーン版画とドローイング作品が派生した。版画は彫刻／マリオネットの分解可能な部位をモチーフとし複数版制作され、様々な動物をモチーフにしたドローイングの上にヒエログリフか獣の足跡のように印刷される。言い表せないなにかを物語るための、読めないアルファベットをつくる試みである。

※案内状の写真は、実際にこの彫刻を任意の参加者ととも動かした際に撮影したものです。

2021年9月 吉田萌